

相手の普段と異なる行動が対人感情と原因帰属に及ぼす効果

豊田弘司

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育心理学))

川崎弥生

(日本学術振興会・専修大学 人間科学部)

The effects of the unusual behavior by a person on interpersonal affection and causal attribution

Hiroshi TOYOTA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Yayoi KAWASAKI

(Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Sciences/School of Human Sciences, Senshu University)

要旨：仮想場面法を用いて、相手の普段と異なる行動によって良い状況になった場合と、悪い状況になった場面を設定し、相手への印象、相手の行動の原因帰属及び相手への働きかけの意欲の関係を検討した。その結果、相手との関係が良い状況になった場合は、それまでの相手との関係が良くなくても、相手への快感情及び相手への働きかけの意欲が高かった。そして、好意への帰属が高いほど、相手への働きかけの意欲の高くなることが示された。一方、相手との関係が良くても、相手の行動で悪い状況になった場合には、相手への働きかけの意欲も低くなることが示され、その際の偶然への帰属の程度が大きいほど、相手への働きかけへの意欲の維持されることが示された。したがって、直前の相手からの行動によって相手への感情や対人関係を維持しようとする意欲の規定される可能性が示された。また、随伴経験の高い者ほど、普段と異なる悪い行動を相手がとった場合でも、それを偶然に帰属する傾向のあり、対人意欲の低下を抑制することが明らかになった。これらの結果から、人と関わる意欲を維持する上で、随伴経験と原因帰属の重要性が示された。

キーワード：原因帰属 causal attribution
普段と異なる行動 unusual behavior
対人感情 interpersonal affection

1. はじめに

学校教育において児童・生徒の対人関係における適応を促すことは重要な課題である。対人関係における要因は多いが、中でも、児童・生徒によっては、安心できる人が重要である。豊田・岡村 (2001) では、居場所を安心できる人と定義し、その後の一連の研究 (e.g., Toyota, 2008, 2009) においてその居場所 (「安心できる人」) によって適応の指標である孤独感が異なることを明らかにしている。例えば、豊田・大賀・岡村 (2007) は、居場所が自分ひとりである者は、母親や友人が居場所である者よりも孤独感が高いという結果を明らかにしている。ただし、自分ひとりが居場所である場合であっても情動知能 (emotional intelligence; EI) が高い者は、孤独感を抑制できることを明らかにしている。また、豊田・照田 (2012) は、情動知能の高い者は、ストレスの認識を抑制し、その結果がストレス反応を軽減することを示している。これらの結果は、情動知能の育成が適応に重要な要因であることを示唆している。

では、情動知能を育成すれば、児童・生徒の学校適応が向上することになるが、そのために行われているのが、社会性と情動の学習 (Social and emotional learning; SEL) である (小泉, 2011)。有効な訓練ではあるが、多くの時間を要し、現在の学校教育カリキュラムへ統合することの困難性は高い。また、情動知能を規定する要因として、随伴経験 (豊田・島津, 2006)、共感経験 (豊田, 2008) 及び内的他者意識 (豊田・森田・岡村・稲森, 2008) が明らかにされているが、随伴経験や共感経験を児童・生徒へどのように活動を通して経験させれば良いか、内的他者意識をどのように授業の中へ組み入れていけば良いのかという課題がある。豊田ら (2007) 及び豊田・照田 (2012) が示したことは、情動知能の高い者は、孤独感や不快な事象に対してそれを自分にとってそれほど不快な事象を感じないように再解釈するスキルの優れていることがうかがえる。したがって、不快な事象をどのように再解釈するかという一定の方向性を示せば、児童・生徒の学習適応を促す可能性が見いだせるといえる。

では、どのような解釈が不快な感情を低減できるのだろうか。例えば、学校において誰かにきつい言葉を言われ

た場合、その子が自分を憎んでいるという解釈をすれば、またきつく言われると思ってより不快な感情が喚起する。しかし、たまたまその子の機嫌が悪かっただけと考えれば、不快な感情は少なくなる。このような受け取り方の違いは、学習意欲との関連で数多く研究されている原因帰属 (causal attribution) の枠組みと類似したものである。原因帰属とは、ある事象の原因を何らかの要因に求めることである。一般に、人間は日常生活での事象に対して何らかの原因を想定し、想定された原因によってその後の活動が異なる。Weiner, Heckhausen, Meyer, & Cook (1972) は、想定される原因として、能力、努力、課題の困難度及び運の4つの要因 (原因帰属要因) を提唱した。これらの要因は、Rotter (1966) によって提唱された統制の位置 (locus of control) 次元によって内的統制要因 (能力、努力) と外的統制要因 (課題の困難度、運)、安定性の次元によって安定要因 (能力、課題の困難度) と不安定要因 (努力、運) に区分されている。そして、上述した統制の位置及び安定性の次元に統制可能性の次元 (統制可能 - 統制不可能) を加えた枠組みも提唱している (Weiner, 1979)。

これらの原因帰属の枠組みをもとに、豊田 (2016) は、自分の学習活動における努力から予想される結果が得られた場面 (随伴場面) と、得られなかった場面 (非随伴場面) を仮想場面として設定し、その比較を行った。その結果、前者が後者よりも次回への意欲の高いこと、及び内的統制要因に帰属する傾向が次回への意欲を規定することを見いだした。豊田・川崎 (2017) は、豊田 (2016) と同じ場面を用い、原因帰属と意欲の関係を検討した。その結果、努力が成功にもたらした随伴場面においては男女ともに努力帰属と次回への意欲に正の相関が認められた。したがって、自分の努力に帰属する程度が、次回への意欲を規定することが示唆されたのである。このように、仮想場面法を用いた原因帰属と学習意欲との研究は、学習意欲を規定する要因としての原因帰属の重要性を示唆している。

では、原因帰属によって日常生活への適応や児童・生徒の学校適応は規定されるのであろうか。Heider (1958) によれば、環境に適応するために原因帰属は重要であり、学習活動以外の原因帰属が存在する。小川 (2011) は、病気、対人トラブル等といった日常生活でのネガティブな出来事の仮想場面を想定し、場面ごとの感情と原因帰属の関係を検討している。その結果、全ての場面においてネガティブな出来度に対する原因を運や他者からの妨害に帰属した人よりも自分自身の能力に帰属した人の方が落ち込み感情が高くなるということを明らかにしている。また、Weiner ら (1972) においても、時間的に変化が少なく、安定している能力に原因帰属すると、不安定な努力に原因帰属するよりも次の行動への期待が減少し、あきらめに近い感情が喚起されることが指摘されている。そこで、豊田 (2012) は、仮想場面法を用いて対人関係場面における感情と原因帰属の関係を検討した。そこでは友好的行動、援助的行動が、自分に要求される場合と他人に要求される場

合を比較した。その結果、相手に対する感情は相手の性 (同性、異性) 及び好意 (非好意) への帰属の程度によって規定され、好意 (非好意) への帰属は偶然への帰属と負の相関のあることが示されている。

ただし、このような対人場面において感情や帰属に影響するのは相手との関係である。そこで、豊田・田中 (2018) は、相手との関係を反映する相手に対する印象 (良い、悪い) 及び相手からの発言内容 (ポジティブ: P、ネガティブ: N) を組み合わせて、4つの場面を設定し、相手に対する印象と相手からの発言内容が相手に対する感情及び原因帰属に及ぼす効果を検討した。その結果、相手から P 発言がなされた場合には、相手の印象が良い場合が悪い場合よりも快な感情が喚起されるが、相手から N 発言がなされた場合には、相手の印象が悪い場合が良い場合よりも不快な感情の喚起が緩和されることが分かった。また、相手の性別については、相手から P 発言がなされると、相手の印象が良い場合には相手が異性よりも同性に対する好意帰属が大きい、相手の印象が悪い場合にはこの両者に差はなかった。さらに、相手の印象が良い場合には相手の発言が P 発言の場合は好意帰属、N 発言の場合は非好意帰属を行うが、それぞれの好意及び非好意帰属の程度は同じくらいであった。一方、相手の印象が悪い場合には、P 発言に対しては好意帰属の程度が小さくなり、N 発言に対しては非好意帰属の程度が大きくなることが示された。豊田・田中 (2018) で検討したのは、相手との関係を反映する相手に対する印象 (良い、悪い) 及び相手からの発言内容 (P、N) を組合せであったが、言い換えれば、相手に対する印象から予期される発言と相手からの発言の一致・不一致によって、感情や原因帰属が影響されたことを示したのもといえる。すなわち、あらかじめ予期していた行動 (普段の行動) と実際の行動とが一致しない場合は、感情や原因帰属が大きく影響されるということである。同じように、豊田 (2016) において扱った随伴場面は、努力から予想される結果と一致した場合、一致しない場合 (非随伴場面) を比較したことになる。したがって、予想と結果が一致するか否かは、感情や原因帰属を規定する重要な要因であるといえよう。特に、一致しない場合に感情や原因帰属が大きく影響される。そこで、本研究では、豊田・田中 (2018) と同じく仮想場面法を用い、相手からの行動が予期した行動と一致しない場合に注目した。ただし、一致しなくても、良い結果になる場合と悪い結果になる場合がある。そのため、この両場面を設定して、感情、原因帰属及び対人関係における意欲の関係を検討することが本研究の第1の目的である。

上述したような場面での感情や原因帰属には、個人差が大きく影響すると考える。その個人差変数の中で、随伴経験は重要である。随伴経験とは努力に成果が伴う経験であるが、対人関係においては自分から相手への肯定的な行動に対して相手が同じく肯定的な行動を自分に返してくれる場合をさす。言い換えれば、自分の行動に対して相手か

Table 1 場面ごとの感情、帰属及び対人意欲度評定値の平均と、随伴及び非随伴経験量との相関係数 (r)

性		予期しない良い結果				予期しない悪い結果			
		感情	好意 帰属	偶然 帰属	対人 意欲	感情	非好意 帰属	偶然 帰属	対人 意欲
男性 (n=107)	<i>M</i>	5.34	3.59	4.60	4.60	2.29	3.55	3.86	3.83
	<i>SD</i>	0.94	1.41	1.17	1.05	0.94	1.43	1.40	1.20
	感情との相関 (r)	—	.32***	.09	.37***	—	-.09	.08	.36***
	好意 (非好意) 帰属との相関 (r)		—	-.29**	.51***		—	.09	-.19*
	偶然帰属との相関 (r)			—	-.03			—	.16+
	随伴経験(M45.85 SD 6.13) との相関 (r)	.12	.08	.12	.20*	-.15	.15	.06	-.04
	非随伴経験量(M29.18 SD 7.03) との相関 (r)	.04	.01	.23*	-.03	-.07	.07	.14	.10
女性 (n=193)	<i>M</i>	5.39	3.53	4.65	4.44	2.11	3.57	4.23	3.49
	<i>SD</i>	0.85	1.20	1.11	1.00	0.79	1.30	1.23	1.22
	感情との相関 (r)	—	.23**	.08	.43***	—	-.12	.17*	.40***
	好意 (非好意) 帰属との相関 (r)		—	-.21*	.23**		—	-.07	-.29***
	偶然帰属との相関 (r)			—	-.09			—	.34***
	随伴経験(M48.46 SD 6.87) との相関係数 (r)	.12	.14	-.02	.16*	-.00	.04	.20*	.22**
	非随伴経験 (M28.93 SD 7.17) との相関係数 (r)	.10	.06	.21*	-.06	-.00	-.01	.01	.01

+p<.10 *p<.05 **p<.01

のであるが、豊田 (2006) で大学生を対象に調査を行ったところ、自尊感情や自己効力感との関連が確認されているものである。この尺度は、随伴経験 (項目例「困っているとき友人に助けを求めたら、力になってくれた」) 及び非随伴経験「友達のためを思ってしたことが、逆に誤解された」) を調べる 15 項目ずつから構成されており、各項目に対しては、「よく経験したことがある」「少しは経験したことがある」「あまり経験したことがない」「全く経験したことが無い」の 4 段階評定尺度が用いられた。

2. 3. 調査手続

仮想場面調査は、第 1 著者の授業において集団的に実施した。事前には、原因帰属の説明はせずに、上述した調査用紙を配布して調査を実施した。調査は約 3 分で終了し、この調査目的と意義の説明をすぐに行った。また、主観的随伴経験尺度に関しては、次週の授業において約 5 分で実施した。両調査ともに、個人名が特定されるデータとして扱われないこと、成績との関連がないこと及び提出は任意であることが説明された。そして、承諾を得た者のみが調査用紙を提出した。

3. 結果と考察

Table1 には、場面ごとの相手に対する感情価 (不快 - 快)、好意への帰属度、偶然への帰属度及び対人意欲度における平均評定値と SD が示されている。

3. 1. 感情評定値 (快 - 不快)

本研究の目的ではないが、感情評定値について 2 (参加者の性; 男性、女性) × 2 (場面型; 予期しない良い結果、予期しない悪い結果) の分散分析を行った。その結果、場面型の主効果 ($F_{(1,298)}=1545.57, p<.001$) が有意であり、予期しない良い結果場面が悪い場面よりも感情評定値の高いことが示された。性の主効果 ($F_{(1,298)}=.86$) 及び性 × 場面型の交互作用 ($F_{(1,298)}=2.19$) は有意でなかった。この結果は、予期しない良い結果が悪い結果よりも快感情が喚起されることを示している。ただし、本研究で設定された場面はいずれも相手が普段しない行動 (予期しない行動) をした場面であるので、良い結果と悪い結果の違いが感情に反映されている。評定値は 1~6 点まで分布するので、中点は 3.5 になる。この中点からの隔たりが影響の大きさを反映すると考えられるが、良い結果の隔たり (男子は 1.84

(5.34と3.5の差)、女子は1.89 (5.39と3.5の差) が悪い結果の隔たり (男子は1.21 (2.29と3.5の差)、女子は1.39(2.11と3.5の差)) よりも大きい。したがって、直前の結果は不快感情よりも快感情へ与える影響の大きいようにも思えるが、予期しない悪い結果の場面では相手が普段の行動をすれば良い結果が期待できるので、その期待が不快感情を抑制したのであろう。その証拠に予期しない悪い結果場面における偶然帰属評定値(「たまたま機嫌が悪かった」程度)と感情評定値の間に正の相関(男女込みで $r=.11$, $p<.05$; 男子 $r=.08$, 女子 $r=.17$, $p<.05$)が認められた。相関値は小さいが、偶然に帰属することによって快感情が高まる可能性がうかがえる。

3. 2. 好意(非好意)帰属度評定値

好意(非好意)帰属評定値について、2(参加者の性;男性、女性)×2(場面型;予期しない良い結果、予期しない悪い結果)の分散分析を行った。その結果、性の主効果($F_{(1,298)}=.03$)、場面型の主効果($F_{(1,298)}=.00$)及び性×場面型の交互作用($F_{(1,298)}=.13$)はいずれも有意でなかった。したがって、好意帰属に関しては場面による違いはなかった。

3. 3. 偶然帰属評定値

偶然帰属評定値について、2(参加者の性;男性、女性)×2(場面型;予期しない良い結果、予期しない悪い結果)の分散分析を行った。その結果、場面型の主効果($F_{(1,298)}=40.95$, $p<.001$)が有意であり、予期しない良い結果場面が悪い場面よりも偶然帰属評定値の高いことが示された。しかし、性の主効果($F_{(1,298)}=3.38$)及び性×場面型の交互作用($F_{(1,298)}=2.97$)はいずれも有意傾向であった($p<.10$)。交互作用が有意傾向であったので単純主効果検定を行ったところ、予期しない悪い場面において性の単純主効果が有意であり($F_{(1,596)}=6.30$, $p<.05$)、女子が男子よりも偶然帰属評定値が高かったが、予期しない良い場面においては性の単純主効果は有意でなく($F=.14$)、偶然帰属評定値の差はなかった。したがって、予期しない悪い結果において偶然帰属における性差が認められることになる。女子は男子よりも予期しない悪い結果を偶然に帰属することによって快感情を促し(上述したように、偶然帰属と感情評定値の相関は、男子 $r=.08$, 女子 $r=.17$, $p<.05$)、対人意欲の向上(偶然帰属と対人意欲評定値の相関は、男子 $r=.16$, 女子 $r=.34$, $p<.001$)をもたらす可能性が示唆された。

3. 4. 対人意欲(相手への働きかけ)評定値

対人意欲評定値について、2(参加者の性;男性、女性)×2(場面型;予期しない良い結果、予期しない悪い結果)の分散分析を行った。その結果、場面型の主効果($F_{(1,298)}=161.82$, $p<.001$)が有意であり、予期しない良い結果場面が悪い場面よりも対人意欲評定値の高いこと

が示された。この結果は、これまでの関係が良い相手であっても予期しない相手の行動によって悪い結果になった場面では相手への働きかけの意欲が低下することがわかる。その反対に、これまでの関係が悪くても、直前の相手の予期しない行動によって良い結果が生じた場面では相手への働きかけの意欲は向上することがわかった。また、性の主効果($F_{(1,298)}=4.51$, $p<.05$)が有意であり、男子が女子よりも対人意欲評定値の高いことが示された。男子の方が女子よりも予期しない結果に関わりなく、相手への働きかけの意欲が高いことが示唆された。ただし、性×場面型の交互作用($F_{(1,298)}=1.82$)は有意でなかった。

3. 5. 感情、帰属及び対人意欲評定値間の相関(r)

本研究の第1の目的は、場面ごとに感情、帰属及び対人意欲間の関係を検討することであった。Table 1をみると、感情評定値と対人意欲との相関はいずれも有意な正の相関が得られている。この結果は、予期しない結果によって喚起された感情が次回への対人意欲に影響することを示している。

帰属と対人意欲との関係に関しては、予期しない良い結果場面では、好意帰属することによって対人意欲が喚起され(男子 $r=.51$, $p<.001$ 、女子 $r=.23$, $p<.01$)、予期しない悪い結果場面では非好意帰属によって対人意欲が抑制される(男子 $r=-.19$, $p<.05$ 、女子 $r=-.29$, $p<.001$)という結果になった。豊田・川崎(2017)は帰属による意欲の違いを明らかにしているが、本研究においても好意帰属によって対人意欲の変動することが示されたのである。本研究の調査用紙では先に感情をたずねる項目があり、その後帰属をたずねる項目が設定されている。しかし、好意帰属することによって快感情が喚起され、非好意に帰属することによって不快感情が喚起されることもある。そして、その喚起された感情が対人意欲に影響する可能性もある。これらの因果関係については別の調査用紙を設定する等の工夫をして検討する必要がある、今後の課題である。

一方、偶然帰属と対人意欲との関係においては、予期しない良い結果場面では両者の関係は無相関であった。しかし、予期しない悪い結果では、男子では正の相関が有意ではなかったが($r=.16$)、女子では有意であった($r=.34$, $p<.001$)。したがって、偶然帰属することによって対人意欲の低下が抑制されることが示された。従来の原因帰属研究からすれば、偶然帰属は意欲を喚起しないことが指摘されているが(豊田, 2003)、偶然に帰属することによって意欲の低下を抑制できるという間接的な促進の側面を示した結果といえよう。三宅(2000)によれば、悪い結果を自分に関連する要因に帰属しないことによって次の機会に対する期待が低下しないことを抑制するという自己保護的帰属パターンのあることを指摘しているが、本研究における偶然帰属はこの自己保護的帰属パターンを反映していると解釈できよう。また、偶然帰属と感情との相関に関しては予期しない悪い結果場面において女子において

のみ正の相関が有意であった ($r=.17, p<.05$)。この結果は、偶然帰属によって不快感情が抑制され、それが対人意欲の低下を抑制したという解釈もできよう。上記の課題とともに今後の検討事項である。

3. 6. 随伴及び非随伴経験と各評定値間の相関 (r)

本研究の第2の目的は、予期しない悪い結果場面における偶然帰属及び対人意欲評定値は、随伴経験量と正の相関があるという予想を検討することであった。調査の結果、男子においては随伴経験と偶然帰属評定値と対人意欲評定値間の相関は無相関であったが、女子では偶然帰属評定値との相関が有意であり ($r=.20, p<.05$)、対人意欲評定値との相関も有意であった ($r=.22, p<.01$)。したがって、女子において予想は支持されたことになる。すなわち随伴経験が多い者は、予期した行動と異なる悪い行動があっても、その原因を自分の特性に帰属しないで、偶然に帰属する傾向がある。この傾向は先に紹介した自己保護的帰属パターンであるが、Silver, Mitchell & Gist (1995) は、自己効力感の高い者においてこの自己保護的帰属パターンが多いことが示されている (三宅, 2000)。自己効力感は随伴経験量によって規定されるので (牧ら, 2003; 豊田, 2006)、Silverら (1995) の結果を追認した結果であるともいえよう。また、随伴経験の多い大学生は自尊感情が高いので (豊田, 2006)、その高い自尊感情を維持するための方略として悪い結果を偶然に帰属しているとも考えられる。さらに、予期しない悪い行動にあっても、対人意欲 (「次回に会った場合に、こちらから声をかける意欲」) は低下しないのは、随伴経験量の多い者がこれまで多くの成果を得てきているので、予期しない悪い結果があったとしても、それによって対人意欲が低下するという可能性が少ないと説明できる。ただし、男子において上記の予想が支持されなかった理由については今後の検討課題である。

さらに、非随伴経験と偶然帰属評定値間にも、興味深い結果が得られた。すなわち、予期しない良い結果場面について非随伴経験量と偶然帰属評定値間に正の相関が認められたのである (男子、女子の順に、 $r=.23, r=.21$, ともに $p<.05$)。非随伴経験の多い者は予期しない良い結果に対しては偶然帰属する傾向のあることが明らかになったのである。非随伴経験と対人意欲評定値との相関は無相関であったので、非随伴経験が対人意欲を直接的に抑制することはないと考えられる。しかし、Weinerら (1972) によれば、運や偶然という不安定要因への帰属は、次回に同じ結果が生じるという期待を生まないとされている。したがって、偶然帰属によっては次回への意欲 (本調査では対人意欲) が喚起されず、非随伴経験量の多さが偶然帰属傾向を高め、その結果対人意欲が低下するという関係が示唆された。

4. 教育的意義

本研究で注目すべき結果は、相手からの予期しない行動によって悪い結果になった場合でも、「たまたま相手の機嫌が悪かった」という偶然帰属することによって、対人意欲が維持されるということである。偶然帰属することによって、相手からの予期しない行動によってもたらされた悪い結果の影響を抑制するものである。偶然帰属は不安定要因であるので、その悪い結果という事象の影響をその事象のみにことに限定できることになる。したがって、本人にとって悪い結果である場合には、偶然に帰属することの有効性があるといえよう。すなわち、その悪い結果が生じた事象はその事象に限定されるという認識をもたせることが大切であろう。

また、男子においては認められなかったが、女子においては随伴経験の多い者は偶然帰属傾向が高く、対人意欲も高い傾向にあることが示された。随伴経験量は適応を促す特性を育成することが示されており、豊田・島津 (2006) は情動知能、豊田 (2006) は自尊感情と自己効力感、中学生を対象とした牧ら (2003) は自己効力感が随伴経験量によって高められることを示唆している。本研究ではそれらに加えて、随伴経験量によって悪い結果の影響を長引かせないような原因帰属傾向 (偶然帰属) を促す可能性が示唆された。児童・生徒の原因帰属は、教師や保護者の言葉かけによって規定されるので (豊田, 2003)、児童・生徒にとって悪い結果の出来事が生じた場合には、教師や保護者が偶然帰属を促すような言葉かけをして方向づけることが必要であろう。また、児童・生徒に随伴経験を多く経験させることにより、本研究における偶然帰属のように、悪い結果に対応するための自己保護的帰属パターン (三宅, 2000) が習得される可能性が高まるのである。

引用文献

- Heider, F. (1958), *The psychology of interpersonal relations*. Wiley, New York. (大橋正夫 (訳) 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- 小泉令三 (2011), 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 牧 郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男 (2003), 主観的随伴経験が中学生の無気力感に及ぼす影響 教育心理学研究, 51, 298-307.
- 三宅幹子 (2000), 特性的自己効力感とネガティブな出来事に対する原因帰属および対処行動 性格心理学研究, 9, 1-10.
- 小川翔大 (2011), 他者からの同情によって生じる感情 - 出来事の原因帰属と相手との親密さによる感情の違い - 教育心理学研究, 59, 267-277.
- Rotter, J. B. (1966), Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- Silver, W. S., Mitchell, T. R., & Gist, M. E. (1995), Responses

- to successful and unsuccessful performance: The modeling effect of self-efficacy on the relationship between performance and attributions. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 62, 286-299. (三宅, 2000 による) .
- 豊田弘司 (2003), 教育心理学入門 - 心理学による教育方法の充実 - 小林出版
- 豊田弘司 (2006), 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 15, 7-10.
- Toyota, H. (2008), Interpersonal communication, emotional intelligence, locus of control and loneliness in Japanese undergraduates. In J. Van Rij- Heyligers (Ed.), *Intercultural Communications across University Settings-Myths and Realities*. Refereed Proceedings of the 6th Communication Skills in University Education Conference. (pp. 42-54). New Zealand: Pearson Education.
- 豊田弘司 (2008), 女子大学生における情動知能に及ぼす共感経験の効果 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 17, 23-27.
- Toyota, H. (2009), The person who eases your mind "Ibasyo" and emotional intelligence in interpersonal adaptation. *Horizons of Psychology*, 18, 23-34.
- 豊田弘司 (2012), 対人距離が他者の行動に対する原因帰属と感情に及ぼす効果 奈良教育大学紀要, 61, 27-33.
- 豊田弘司 (2016), 努力と結果の随伴性、感情及び動機づけの関係 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 2, 19-25.
- 豊田弘司・川崎弥生 (2017), 努力と成果の随伴性による原因帰属が動機づけに及ぼす効果 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 3, 23-30.
- 豊田弘司・森田泰介・岡村季光・稲森涼子 (2008), 大学生における他者意識と情動知能の関係 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 17, 29-34.
- 豊田弘司・大賀香織・岡村季光 (2007), 居場所（「安心できる人」）と情動知能が孤独感に及ぼす効果 奈良教育大学紀要, 56, 41-45.
- 豊田弘司・岡村季光 (2001), 大学生における『居場所』奈良教育大学教育研究所紀要, 37, 37-42.
- 豊田弘司・島津美野 (2006), 主観的随伴経験と情動知能が感情に及ぼす影響 奈良教育大学紀要, 55, 27-34.
- 豊田弘司・田中俊行 (2018), 相手の印象と発言が対人感情と原因帰属に及ぼす効果 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 4, 27-33.
- 豊田弘司・照田恵理 (2012), 大学生におけるストレス、ストレス反応及び情動知能の関係 奈良教育大学紀要, 62, 41-48.
- Weiner, B. (1979), A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, 71, 3-25.
- Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W. H., & Cook, R. E. (1972), Causal ascription and achievement behavior: A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 239-300.